# ポスター

## 周術期：術前管理

座長:脇 研自 (倉敷中央病院)
Sat. Jul 18, 2015 11:14 AM - 11:44 AM ポスター会場 (1F オリオン A+B)
III-P-144～III-P-148
所属正式名称：脇研自(倉敷中央病院　小児科)

## [III-P-147]心膜切開後症候群におけるアスピリンの有用性の検討

○渡邉 瑠美[1], 石井 徹子[2], 中西 敏雄[2] (1.東京女子医科大学医学部　医学科,　2.東京女子医科大学　循環器小児科)
Keywords:心房中隔欠損症, 心膜切開後症候群, アスピリン

【背景】心房中隔欠損症(ASD)の術後に心膜切開後症候群(PPS)を認めることがあり、アスピリン、ステロイドの有用性が報告されている。【目的】 ASD術後のアスピリン内服による、 PPSにおける心タンポナーデの発症の予防効果を検討すること。【対象】2008年から2014年に当院で ASDの手術目的で入院した連続65人、そのうち心不全患者、肺高血圧症患者は除いた。【方法】診療記録の後方視的検討。当院では2012年より ASDの術後に全例予防的アスピリンを投与する方針としている。また、 PPSによる心嚢水の貯留に対しては、まず利尿剤の増量を行い、利尿剤の効果が不十分で、かつタンポナーデが懸念される場合ステロイドを使用し、タンポナーデに対しドレナージを行っている。以上より、アスピリンの予防内服を行った2012年以降の群(＋)と、2011年以前の行わなかった群(－)に分類した。2群間で PPSの心嚢水貯留に対し、ステロイド治療、ドレナージを行った頻度をχ二乗検定で、ドレーン留置期間と退院時の利尿剤の量を t検定で検討した。 $p<0.02$を有意差ありとした。【結果】予防内服(＋)群は23人、予防内服(－)群は42人であった。予防内服(－)群では、42人中8人に2～3mmの心嚢水貯留が認められたため、アスピリンが投与された。予防内服(＋)群では、ステロイドの使用2人、ドレナージ0人、ドレーン留置期間3.4±0.6日であり、退院時ラシックス量1.3±0.6mg/kgであった。一方予防内服(－)群はステロイドの使用1人、ドレナージ0人、ドレーン留置期間3.2±1.5日であり、退院時ラシックス量1.4±0.7mg/kgであった。ステロイド使用、ドレナージ、ドレーン留置期間、退院時ラシックス量いずれも有意差を認めなかった。副作用は、予防内服(＋)群の1人に薬剤性皮疹と肝機能上昇を認めた。【結語】 ASD術後のアスピリン内服による、 PPSにおける心タンポナーデの発症の予防効果は認められなかった。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery